

# The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

## 蒼天の騎士

### 作成レギュレーション

#### 基本概要

- ・経験点：170000 点
- ・資金：338000G
- ・名誉点：2000 点
- ・成長回数：316 回
- ・マジテックトームストーン：戦記 2500 個以上、詩学 1250 個
- ・アイテムレベル制限：武器ランク S 以上／防具ランク S 以上

#### 制限事項

- ・放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・武器防具強化に関する特殊制限
- ・シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・戦利品判定は振る

#### その他注意事項

- ・レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

### 導入

君達は、シンファクシ家の執事がそわそわしていることに気付く。

どうやら、クリストフとマルセルの任務のことに関して話すべきことがあるようだ。

(※GM メモ：RP 待機)

#### シンファクシ家の執事

「マルセル様、クリストフ様…双方の任務が、無事に終了したようですね。只今、主人を呼んで参ります…しばらくお待ち下さい」

(※GMメモ：RP待機)

<hr>

君達は、エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵が戻ってくるのを待っていた。  
数分後、シンファクシ伯爵が来た。

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「戻られたか、冒険者たち！貴殿らの活躍については、息子たちから聞き及んでおるぞ。

内心はともあれ、叢嶺家やツェマルド家から、感謝状が届いているほどでな、私も後見人として鼻が高い。まさしく貴殿らは、我らシンファクシ家の友と言えよう！」

(※GMメモ：RP待機)

そこへ、駆け込んでくるように、シンファクシ家の家令が入ってくる。

シンファクシ家の家令

「しっ、失礼致します！」

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「無礼であろう、何事か…」

シンファクシ家の家令

「申し訳ありません。ですが、急ぎご報告しなければならない、緊急事態が発生したのでございます。我らが客人、エクセリア様とその侍女リリアーナ様が、異端疑惑により、連行されてしまわれたのです！」

(※GMメモ：RP待機)

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「なんだと…！？く、詳しく説明せい！」

そう言って、シンファクシ家の家令に答えを求めるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

シンファクシ家の家令

「ハッ…。ご両人は、平民向けの酒場に入ったりし、情報収集をされていた様子。

その際、下賤な者たちと接触されたようで…それを知った『蒼天騎士』のアルト卿が、異端審問局に告発されたのでございます」

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「アルト卿とは、ツェマルド家の血を引く者…。知性のかけらもないが、武術だけは一流という無骨者だ。危機が喉元を過ぎれば、足の引っ張り合いを始める。どうやら、ヴァルマーレの官家社会に蔓延る悪しき伝統に、貴殿らを巻き込んでしまったようだ…」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、シンファクシ伯爵の提案の元、神道衛士団本部へと赴くことになる。

ミシガン卿に相談することになる。

(※GMメモ：RP待機)

とらぶる・おん・とらぶる

君達は、等護下層、神道衛士団本部に赴いた。

そこには既に、トーレスがいた。

ミシガン

「トーレスから話は聞いておるぞ。お前達が『暗魂の冒険者』だな？だが、悠長に話してもいられないな。エクセリアたちの件で来たんだろう？」

(※GMメモ：RP待機)

トーレス

「雲神『フヴィートヴァル』の件を報告していたところに、例の異端告発の情報が舞い込んで来ましてね。彼女らが潔白であることは、明白だと言うのに…！」

ミシガン

「俺としても、彼女らの潔白は信じている。だが厄介だな、蒼天騎士のアルト卿が告発してきたのは、『蒼天騎士』とは、天皇陛下を御護りする十二名の騎士。簡単に言えば親衛隊だ。彼らに命令できるのは、天皇陛下お一人だけなのだ」

(※GMメモ：RP待機)

ミシガン

「まあ、ここからは単純な方法で無罪を勝ち取るまでだ。そう…『決闘裁判』だ」

(※GMメモ：RP待機)

戸惑う君達に対し、トーレスが説明を始める。

トーレス

「決闘裁判というのは、太陽神『ティダン』の御前で、被告人が告発人と決闘し、潔白を証明するというものだ」

ミシガン

「今回の場合、エクセリアとリリアーナが、告発人であるアルト卿ら 2 名の闘士と戦うことになる。そして、勝利できれば無実、というわけだ。

相手は百戦錬磨の蒼天騎士とはいえ、珖焰龍神が相手では分が悪かろう。そこで彼らは、エクセリアの代理闘士を立てることを要求してきた」

(※GMメモ：RP待機)

ミシガン

「これに対し、裁判所はこれを承認しているからこそ、お前達の内の誰かがやればいいということだ」

武力の公平性という視点から、百戦錬磨が過ぎるエクセリアではなく、誰かもう一人を選ぶ権利をこちらに齎してきたことに、君達は驚くだろう。

(※GMメモ：RP待機)

ここから先、暫くの間は、『選択した PC』が主軸となってシナリオが進行します。

『選択した PC』は、暫くの間「光の戦士」と呼称します。

きっちり相談した上で、決定して下さい。

トーレス

「決まったな。では、早速俺がエクセリアと面会し、進言してこよう。『神影裁判所』で待っているぞ！」

そう言って、君達の元を去るトーレスだった。

#### 神影裁判所にて

君達は、神影裁判所にいるトーレスに話しかけた。

トーレス

「冒険者諸君。訓練を実戦に変えるものが何か、覚えているかね？」

(※GMメモ：RP待機)

トーレス

「そうだ、イメージだ。考え得る中で最強の己をイメージするのだ。『今度はコイツを超えてやる』と、意識して戦え！」

既に、エクセリアと面会し、『決闘裁判』の仕組みについて伝えてある。法廷で、彼女らが決闘裁判を希望すると宣言したら、エクセリアの『擁護者』として名乗り出るのだ。

貴君らの健闘を期待する！」

(※GMメモ：RP待機)

#### QIB「とらぶる・おん・とらぶる」

君達は、裁判所の公判の場に入った。

(※GMメモ：RP待機)

#### 神影裁判所の裁判長

「これより、被告人の申し立てにより、太陽神『ティダン』の御前におきて、決闘裁判を執り行う！…告発人、前へ！」

白磁の如き鎧を身に纏った、ガラの悪い騎士が二人、前に出る。

神影裁判所の裁判長

「蒼天騎士アルト卿…汝、この者らを告発するか？」

アルト

「我が名は、アルト・ド・ツェマルド！蒼天騎士の名誉に懸けて、そこなる異邦人２名を、異端者との密通容疑により告発するものである！」

(※GMメモ：RP待機)

裁判所内が騒がしくなる。

君達は、彼女らの潔白を、命を懸けてでも証明しなければならない。

神影裁判所の裁判長

「被告人、前へ！」

エクセリア達が前に出る。

神影裁判所の裁判長

「異邦人エクセリア・シャルロッテ・クレア・ゼーゲブレヒト・アウェア…及び、異邦人リリアーナ・カルゾラル。汝らに改めて問う。アルト卿による告発に対し、身の潔白を訴え、決闘裁判を求めるか？」

(※GMメモ：『光の戦士』以外のRP待機)

リリアーナ

「私の名は、リリアーナ。名字はないため便宜上カルゾラルとつけさせてもらった…。

そうだ、私達は無実であり、告発される謂われはない！正統な権利として、決闘裁判を要求します！」

エクセリア

「我が名は、エクセリア・シャルロッテ・クレア・ゼーゲブレヒト・アウェア。

私の実力は並大抵のものではなく、決闘裁判の意義を崩壊させてしまいかねないという懸念点を考慮し、代理闘士を要求する！」

やはり、騒がしくなる。彼女が目合っているわけではない、というのは、彼女の目を見れば火を見るよりも明らかだった。

神影裁判所の裁判長

「確かに、汝ほどの実力のある者が全霊を尽くしてしまえば、この決闘裁判の意義も失われてしまう。汝の公平性を慮る意志を尊重し、今回は特例として、代理闘士の選出を認めよう。…被告人の擁護者として、決闘場に立つ者は誰ぞ？」

(※GMメモ：『光の戦士』のRP待機)

リリアーナ

「来てくれたのか、ありがとう！なんとしても、無実を証明してみせます！」

(※GMメモ：『光の戦士』のRP待機)

神影裁判所の裁判長は、他の裁判官に確認を取る。頷いた彼らは、機構を動かし戦場を整える。

そして、アルト、パウルクライン、リリアーナ、『光の戦士』の4名が、配置につく。

神影裁判所の裁判長

「太陽神『ティダン』よ、ご照覧あれ！そして願わくは、真実を明らかにしたまえ！」

(※GMメモ：BGM「蒼天騎士団」)

敵：義臣のパウルクライン、狂羅のアルト

この戦闘では、PCが選択した『光の戦士（代表キャラ）』と、『リリアーナ』を操作します。

義臣のパウルクライン

「こっちの冒険者の方が旨そうだな…。アルト卿、そっちの料理は任せたぜ！」

狂羅のアルト

「フン…。俺は重苦炊きの魔動天使の遊び相手か…。まあいい…精々楽しませてくれよ、異邦人！」

狂羅のアルトは、3ラウンドごとに鎖によって拘束してきます（鎖の耐久度は200）。鎖を破壊しなかった場合は致命的な爆発を撃ち込んで全滅します。

また、リリアーナは『ボーライド』を使用できません。

『光の戦士』とリリアーナは、蒼天騎士を圧倒した。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアが笑みを浮かべる。うんうんと頷き、彼らが勝ったことを明確に証明する。

神影裁判所の裁判長

「勝負あり！太陽神の神判は降った！被告人の申し出こそ真実であると、太陽神が示された！よって、被告人エクセリア・シャルロッテ・クレア・ゼーゲブレヒト・アウェア、及び被告人リリアーナ・カルゾラルを無罪とする！

これにて、決闘裁判は閉廷！被告人、告発人、双方退廷せよ！」

後語り・決闘裁判

君達が退廷したところを、トーレスが出迎える。

トーレス

「流石は、暗魂の冒険者。成し遂げると思っていたぞ。

それで…イメージしながら戦えたか？」

(※GMメモ：RP待機)

トーレス

「まあいい、お前の戦いにより、エクセリアとリリアーナの嫌疑は晴れた。追って解放されることだろう。諸々の手続きについては、俺に任せてくれ。お前達は先に、『シンファクシ伯爵邸』に戻るといい。伯爵も、帰りを待っておられるだろうからな」

そう言って、君達に帰ることを促すだろう。

(※GMメモ：RP待機)

伯爵邸に戻った後、君達はシンファクシ伯爵に声をかけた。



エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「太陽神ティダンに栄光あれ！…貴殿らの力と、太陽神の威光によって、お二方の無罪を証明することができたようだな！」

マルセル

「一時はどうなることかと心配したが…、全くの杞憂であったようだ」

クリストフ

「かの蒼天騎士に一步も引かない戦い振りだったと、噂好きの皇都民は大騒ぎしていましたよ。流石は、暗魂の冒険者ですね」

(※GMメモ：RP待機)

そのとき、扉を叩く音が響く。

扉を開け、シンファクシ家の家令が入ってくる。

シンファクシ家の家令

「失礼します！…今しがた、宮内庁より、使いの方がいらっしゃいました。な、なんでも天皇陛下が、暗魂の冒険者様方と、お会いになりたいと申しているとのこと…」

(※GMメモ：RP待機)

クリストフ

「へ、へへ、陛下あ！？」

マルセル

「冒険者殿、これは実に名誉なことだぞ！」

それを聞き、シンファクシ伯爵も頷く。

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「うむ。確かに、天皇陛下直々のお招きとは誉れ高きこと。

折りよいのが気にならないわけでもないが、陛下をお待たせするわけにも行くまい。

暗魂の冒険者殿…。エクセリア嬢やリリアーナ嬢のことは我らに任せ、貴殿らは『宮内庁』へ向かってくれ」

シンファクシ家の家令

「『宮内庁』の前に、『宮内庁の禰宜』様がお待ちとのことですよ。」

よろしくお願いいたします」

## 宮内庁の天皇

君達は、宮内庁に向かった。

## 宮内庁の禰宜

「お待ちしております、暗魂の冒険者様方。

天皇陛下がお待ちです…こちらにどうぞ」

宮内庁に入り、君達は和装に身を包んだ老人を目にした。

## ミシガン

「天皇陛下…。光の戦士殿がいらっしゃいました」

## 有仁

「貴公の噂は耳にしておるぞ、英雄殿。神道衛士団のミシガン卿からも、その評判を聞いていた。儂は、有仁…ヴァルマーレ神道を束ねる教祖の立場にもある者よ。

どうしても貴公に、一言詫びねばと思うてな。しかし、この立場にある者が気軽に外に出歩くのは危険だと諭され、無礼と知りつつ、貴公に足を運んでもらったのだ。

それというのも、貴公の友人が異端告発された件よ。どうやら些細な行き違いがあったらしいな…。そうであろう、昌三卿？」

(※GMメモ：RP待機)

## 昌三

「はっ…。恥ずかしながら、我ら蒼天騎士団に寄せられた情報が誤っていたようです。我が部下、アルト卿の独断とは言え、無実の罪で告発したこと、申し訳なく思っている。

この通りだ…」

## 有仁

「貴公らが、ヴァルマーレのために成してくれたことを思えば、斯様な『行き違い』など起きようはずもないのというのに…。帝都防衛戦での働き…改めて礼をさせて欲しい。他の者にも、貴公らを厚く遇するように申しておこう。

さて…昌三卿。人払いを頼めるかの？」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、彼は人払いをする。

有仁

「ふむ、天皇などという立場になると、軽々しい言葉を使うのも憚られるが故に、こうして若者と面と向かって話すだけでも、一苦勞よ…。ところで、英雄殿。…貴公は、『祝福無き者』なる者をご存知かな？」

(※GMメモ：RP待機)

有仁

「貴公を『光の使徒』たる者と見込んで話す。この宮内庁も、奴らからの接触を受けているのだ」

そう言って、彼はことのあらましを話し始める。

有仁

「祝福無き者…。奴らは、混沌の種を蒔いて回る存在よ。邪竜の眷族との戦争を続ける我らに、力を与えると云ってきおった。無論、儼は奴らに与するつもりも、その思惑通りに踊ってやるつもりもありはしない。しかし、連中の企みに対抗しようにも、その真なる目的を知らずしては何もできん…。故に、話を聞く『素振り』をみせつつ、様子を覗ってきたのだ。…いずれ訪れる、奴らとの決戦に備えてな…」

「なぜなのかは、分からんが。奴らは、光の戦士と呼ばれている貴公の力を、殊の外警戒しているようだな。黒の剣士と名乗った奴は、特に裏切りに対して警戒を強めているようだった。だからこそ、儼としても、貴公と協力できるのであれば、手を取り合っていきたいと思っておるのだ。このケルディオンの真なる平和のためにも…な」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、君達は焦ることだろう。思わず頷いたが、やはり底が知れない…。

(※GMメモ：RP待機)

事実が重い。一旦、シンファクシ家の屋敷に戻ろう。

## 事実の解剖

帰還後、君達はエクセリアと話した。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「なぜ、身を引いて代理を要求したか、だって？

…アルト卿が面会してきたときに、言い付けられたんだよ。お前の噂はバカみたいに広まっている、生ける伝説と戦って生き残れる者などどこにもいないから、お前の代わりとなる戦士と戦わせろ、とな」

(※GMメモ：RP待機)

つまるところ脅されたので代理を出した、ということなのだろう。

エクセリア

「それで、宮内庁での収穫は？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「我々に対する謝罪と、貴族への牽制…。そして、自身の関与を否定してきたのか…。

…は？天皇自身が、祝福無き者からの接触を明らかにしたあ！？黒の剣士か…、はいはい、アイニード剣アイニード剣…」

アイニード剣に覇気が詰まっていない、露骨に棒読みしていることが伝わる。

エクセリア

「裁判のドタバタ騒ぎで、言い出せなかったことがあるんだが。龍姫公、エクセリア・エーディンが目を覚ましたらしい」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「私は先に隠れ家に戻る。お前達は一旦ここで待機だ。いいね？」

そう言って、エクセリアは外出するだろう。

## 目覚めの公

…数日後。

君達は、そのシンファクシ家の屋敷で、やれることをしていた。

(※GMメモ：RP待機)

そのとき、通話の耳飾りに声が届く。

エクセリア

『隠れ家に来てくれ』

ただ一言、エクセリアはそう告げた。

墮ちても、あくまで加護を失っただけに過ぎない君達は、再び彼の地を訪れることが可能だろう。

(※GMメモ：RP待機)

エーテライトを使い、君達は隠れ家に戻った。

そこで、君達は病床で目覚めた彼女を見つけることになる。龍刻連邦の嘗ての長、龍姫公だ。しかしなぜだろう、彼女の目に生気がない。

エクセリア

「…どうやら彼女は、目覚めて以降、口々に意識が起きていないらしい。

いや厳密には、意識そのものは目覚めてはいるのだろう。ただ、『己の権勢の根源』である『闇喰らいの力』を食われたからなのか、自我を明確にできなくなっているのかもしれない」

と言い、彼女を深く観察するエクセリア。

生気のない目は、焦点も合わず、ただぼやけた世界を視ていた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「エクセリア・エーディン。私とその名を同じくする者よ。どうか聞いて欲しい。

お前は、確かに敗れ、閻魔竜の力を奪われた。だが、お前の命は未だ現世に留まっている…。この意味が分かるか…？」

龍姫公

「……………」

(※GMメモ：RP待機)

龍姫公は、エクセリアに話しかけられても何も言わなかった。

深いため息をつき、エクセリアは右手を構えて魔力を奔らせる。

エクセリア

「——王を迎えるは三賢人。紅き星は滅びず、ただ愚者を滅するのみ」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「最果ての聖王エクセリアが、世を迷えし魂に告げる。その微睡みから醒め、その荒ぶる魂にて、天地開闢の刻を刻め！アイデア展開！来たれ、《スカーレット・スーパーノヴァ・ドラゴン》！」

エクセリアは、手のひらサイズの召喚獣を即興で顕現させる。

しかし、帯びた魔力は凄まじく、熱が奔るかのように灼けるほどの魔力だった。

(※GMメモ：RP待機)

どうやらエクセリアには、何かしらの策があるようだ。

エクセリア

「彼女の魂を活性化しろ、スーパーノヴァ！カルミヌス・ノヴァ・フラルゴ！」

彼女の指示に従い、スカーレッド・スーパーノヴァ・ドラゴンは闇の魔力を龍姫公に流し込む。しかしてその目的が果たされたのか、龍姫公の目に生気が戻る。

龍姫公

「…なんのつもりだ？」

エクセリア

「お前に作った借りを返すために、お前を呼び戻した」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、エクセリアは治癒魔法を行使する。

エクセリア

「お前が寝ぼけている間に、私はお前が長らくほったらかしていた、ヴァルマーレとの外交問題を解決していたんだ。金の無心故に戦争をする必要はない。経済の回し方は、今のほうが簡単だ。

龍姫公、お前にしか成し得ないことがある。胸にその結晶があるお前にしか、な」

エクセリアは彼女の胸元、服によっては露出する『緋色の大きな結晶』を指し示す。その結晶は、夥しい闇を抱えていた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「その胸の結晶には、食い切れなかった闇の力が秘められている。

と言うより、古の時代、闇により朽ちゆく彼の竜を一身に受け、召喚獣と成したお前の功績が、そこに宿っているじゃないか」

龍姫公

「私の、功績…」

エクセリアは、スカーレッド・スーパーノヴァ・ドラゴンをその結晶に宿らせる。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「ドミナントとして『顕現』できるわけではないが、欠けた『闇の力』が、それで補填できるはずだ」

(※GMメモ：RP待機)

龍姫公

「…それで、政権を戻すわけではないのか？」

エクセリア

「バーカ。そんなことできねえよ。民衆からの信用が欠けているじゃないか。

ただ、『雇われの傭兵』としてなら、私は用件を持っている」

エクセリアはヴァルマーレの地図…西ヴァルマーレを指し示す。

(※GMメモ：RP待機)

**見識判定 目標値：29**

**成功時、その「西ヴァルマーレの地図」が、行ったことのない場所…『淵夏（エナツ）地域』であることが分かる。**

エクセリア

「ここには、特別な血筋の人間しか立ち入れない場所があるという。おそらくは、お前じゃないとできないことだろう」

そう言って、エクセリアは地図を龍姫公に押しつける。

エクセリア

「頼んだぞ。私は手が空いてないのぞな」

(※GMメモ：RP待機)

自室に戻っていくエクセリアを見て、龍姫公は肩をすくめた。



## 報酬

### 基本要素

- ・ 経験点：20000 点
- ・ 資金：12000G
- ・ 名誉点：なし
- ・ 成長回数：8 回

### マジテックトームストーン

- ・ 詩学：100 個